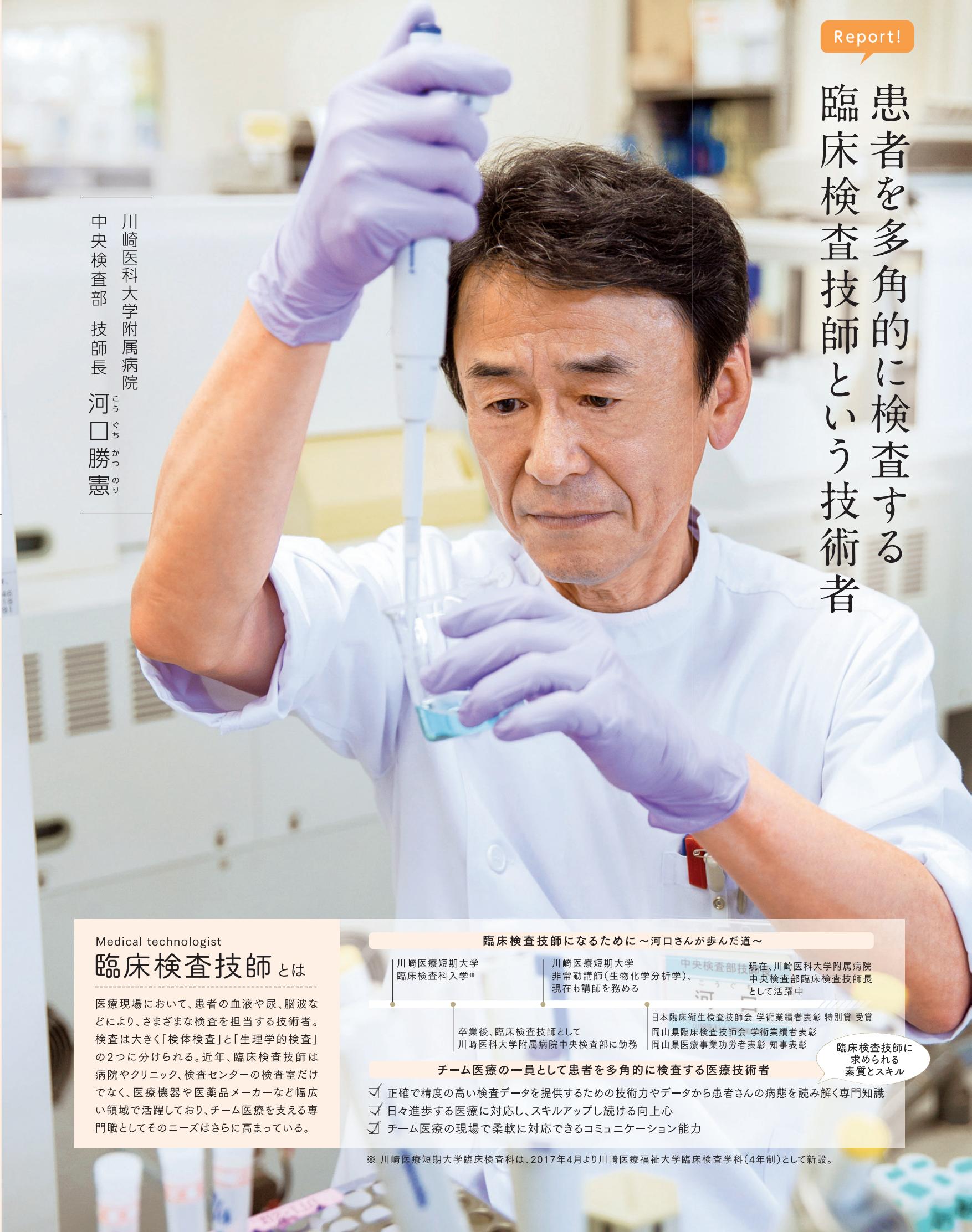


患者を多角的に検査する 臨床検査技師という技術者



川崎医科大学附属病院
中央検査部 技師長 河口勝憲

中四国で唯一の「毒劇物解析室」を院内に設置。救急にも対応。

河口勝憲氏は、三六年のキャリアを誇る臨床検査技師。その歩みは川崎医科大学附属病院ひと筋で、現在は七五人の臨床検査技師が所属する中央検査部の技師長を務めている。

「臨床検査技師の仕事は、大きく分けて二種類あります。ひとつは、患者さんの血液や尿、髄液などの成分分析や細菌やウイルス検査により病気の原因を探り出したり、組織片などを取り出して細胞の標本作りを行なう検体検査。もうひとつは、脳波検査や心電図検査、超音波検査など、直接患者さんの身体の表面や内部の器官からデータを採る生理学的検査（生理検査）です」。

医療現場では、臨床検査技師が行なった検査結果をもとに、医師によって病気の診断やその後の治療計画が立案されている。臨床検査技師が提供するデータが患者さんの診断・治療の指針となるため、臨床検査技師の存在は、医療チーム内でも大きく、重要な役割を担っている。

一九九八年毒物混入カレー事件後、厚生労働省により、高度な化学物質分析装置が全国八か所の高度救命救急センターに配備された。当院もその一つで、中四国で唯一の「毒劇物解析室」を設置している。当室では臨床検査技師が薬毒物の精密検査を行なっており、農薬や薬物中毒など、救急医療にも二十四時間対応している。

医療現場を支えるスペシャリスト 医療最前线 >>>vol.50

川崎医科大学附属病院 臨床検査技師



当院の多様な医療を支える中央検査部のスタッフたち。川崎医療短期大学*の実習生の姿も見える。



検査システムを使い迅速な検査・結果報告を実施。微生物検査データを活用し、院内感染対策にも貢献している。



現代医療を支える臨床検査のスペシャリストたち

中央検査部は迅速さと正確さ、そして信頼をモットーとして、血液や尿など検体の分析、微生物検査、心電図・超音波・脳波などの生理学的検査に至るまで幅広い検査を担当し、365日、24時間体制で医療を支えています。

中央検査部部長
川崎医科大学検査診断学(病態解析)教授
通山 薫



検体は患者さんそのもの。
その思いを若手に引き継ぐ。

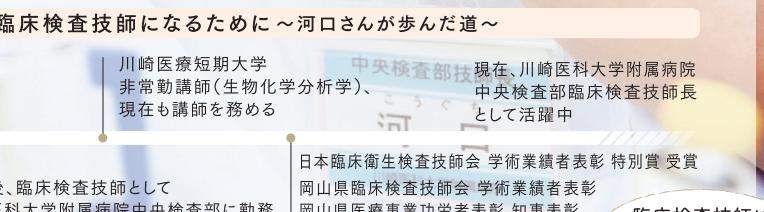
もともと理数系、特に化学の実験が好きだった河口技師長。臨床検査技師という職業を知り、近くに養成校があつたことから今の道を選択。「技師としてスタートしたばかりの頃、ある医師が『検体は患者さんの一部、患者さんそのもの』と言った言葉を今でも心に留めています。自分が検査した検体から病気が発見され、患者さんの命が助かった時は非常に大きなやりがいを感じます。まさに『検体は患者さんそのもの』。大切に扱わないといけない、そう思って仕事に取り組んでいます」。

加えて「臨床検査技師は、直接患者さんと接する機会も多いので、患者さんを思いやる心や発言への気配りも大事」と河口技師長は言う。

大学病院という特性上、川崎医療福祉大学、川崎医療短期大学*の臨床実習も積極的に受け入れている。「将来、臨床検査技師を目指す若者たちに技術や知識、検体の大切さ、患者さんへの接遇を教えるのは私たちの責務です」と河口技師長。取材日も多くの実習生が真剣なまなざしで取り組んでいた。ベテラン臨床検査技師として担う役割は大きい。

臨床検査技師が薬毒物の精密検査を行なっており、農薬や薬物中毒など、救急医療にも二十四時間対応している。

お問い合わせ
川崎医科大学附属病院
倉敷市松島577
086-462-1111
<http://www.kawasaki-m.ac.jp/hospital/>



- 正確で精度の高い検査データを提供するための技術力やデータから患者さんの病態を読み解く専門知識
- 日々進歩する医療に対応し、スキルアップし続ける向上心
- チーム医療の現場で柔軟に対応できるコミュニケーション能力